

在 清 見 聞 録 (その二)

中 村 彰 夫

はじめに

- I 上海の沿革
- II 上海の産物と衣食住に要する物品
- III 上海の景況運輸
- IV 上海港の景況
- V 上海貿易の景況
- VI 上海輸入綿絲の日印比較及び上海輸入海産物と昆布

は じ め に

本稿は、前回¹⁾紹介した高橋正二氏²⁾の、明治23年から25年にわたる手記『在清見聞録』の各所から、経済地理学研究の一視点から、上海に関して記述された部分を抽出し、当時における「上海の実情」に焦点を求め、構成したものである。

なお、原文に忠実をきすため、漢字や、かな使い、送りかな、についてはそのままとし、読解の便を慮り、全文カタカナ書きはひらがな書きに改め、濁点、句読点、ならびに適宜注釈を加えた。

(注)

- 1) 『第一経大論集』第9巻第1・2合併号
- 2) 高橋正二氏については、同上 p. 51 を参照されたい。

I 上 海 の 沿 革

此地（上海）は、周¹⁾の代にては呉と云ひ秦²⁾の時會稽郡に属し三国³⁾の時に呉と云ひ唐⁴⁾の頃に河底と云ふ。漢⁵⁾の代には揚州に属し今は松江府に隸し上海縣を置く。其管轄区域東西六十六清里南北八十四清里なり。

此地方は実は近世に至りて新成せしものと断定すべく。土地総て河流の沈澱質より成るを以て之れを証するに足るべし。又是より十数英里の外に鳳凰山あり。数十里の平原中に此山唯一屹然たり。之れ海島の山となりしものにて周囲の海水漸次埋りたるものなるべく、此山の土石を見ても悉く水辺に在りしを証するに足るの形跡を備へり。且つ蘇州の如きも古昔は海岸に近かりしならん。何となれば蘇州にて吟せし詩に、潮声夜打千門内と云ふ句あり。今の如く海岸より二三百清里を隔つる地に在りては、潮声を聞くの理なければなり。

此附近は古来殆んど戦乱に逢ひしことなく、長髮賊の乱⁶⁾にも幸に其破壊を受けざりし。今日此港の斯く繁盛にして東洋に有名なるに至りし源因は、実に一にして足らざるべしと虽ども外国人其居留地を定め施政を簡易にし賦税を廉にして一般に住民の便利を計りしかば、支那人漸次集り来りて遂に今日の勢を見るに至りしならん。目下進歩の勢尚蒸蒸日上として日の升るが如し。

此地は四通八達して、松江、蘇州、寧波、鎮江、南京、揚州等に通じ、又四川、湖北に至るべし。

(注)

この章は第一巻 p. 46~48 末尾に明治二十三年十月十八日と記されている。

- 1) 周 中国の王朝、紀元前1200年頃殷（イン）の王朝を滅ぼし黄河の中下流域を支配して都を鎬京（コウケイ、西安付近）においた。紀元前8世紀初め異民族の侵入から都を洛邑（洛陽）に移してからはおとろえ、春秋戦国時代といわれる小国のならび立つ時代となり、紀元前256年秦に滅ぼされた。
- 2) 秦 戦国時代の七雄中最も強く、紀元前3世紀初め中国を統一して始皇帝が最初の大帝国をつくったが、わずか15年で滅んだ。
- 3) 三国時代 漢がほろんだあと魏・蜀・呉の三国にわかれた時代（220~280年）をいう。魏は華北にあって曹丕（ソウヒ）が洛陽に都し、蜀は劉備が四川を成都に都し、呉は孫権が江南の建業（トンキン）に都した。
- 4) 唐 中国の王朝（618~907年）、7世紀の初め李淵（高祖）李世民（太宗）父子が隋を滅ぼして統一帝国をたて長安に都した。8世紀中頃安祿山の乱が起ってから財政が乏しくなり異民族の侵入も多くなっておとろえていき、10世紀初め滅んだ。
- 5) 漢 紀元前3世紀の終りから約400年間つづいた王朝、秦が滅んだあと劉邦（高祖）が天子となり長安を都とした。前漢は王莽（オウモウ）によって滅ぼされたが、まもなく後漢として復興した。
- 6) 長髮賊の乱 清朝の1850年天主教徒洪秀全を首領として起った乱で、弁髪を結わず長髪にしたのでこの乱を称する。

II 上海の産物と衣食住に要する物品

此地に於ける植物は楊柳，烏桕樹，山査¹⁾，等の類に過ぎずして，動物には雀甚だ多く又烏鶻，つぐみ等あれども鳥は甚だ稀なり。

近傍各府縣産物の重なるものを挙げれば左の如し。

蘇州は生糸及び其織物にして杭州も之れに同じく，浦東は綿及び綿布織にして川沙所亦之れに同じく，鎮江は縮にして南京は縐子を産す。米は何れも多額を産出せり。

上海に於て衣食住に要する物品を記すれば左の如し。

米——此近傍に於て多額の産出あるを以て別に他地方の供給を要せず。然れども安徽，浙江辺より少量を輸入することあり。

麦——重に北支那より輸入するも麦粉は皆米国カリホルニヤより来る。

塩——重に浙江より来る。又寧波，廣東より来る。元来清国にては外国より塩の輸入を禁ぜり。国内にて製するものは福建，浙江，山東，満州の海岸及び四川なり。四川にて井水より之れを製す。

煙草——福建，廣東より来る。

茶——も亦右に全じ。

豆油——満州牛莊地方より来る。

砂糖——臺灣及び福建より来る。

材木——丸木は福建，板は日本，大材木は米国カリホルニヤ，棺用の良材は安南，暹羅辺より輸入す。

陶器類——福州，景德，宜興等のものなり。

衣服——は此地方産綿製布の地なるを以て之れを用ひて製するも，下等社會に於ては重に英米の金布を用ゆ。而して夏は廣東，湖北，廣西等の麻布を用ゆ。

家屋——は内地のものとは大に其趣を異にし，其建築及び外形共清洋折中の如きもの多し。内地の家屋は天井なきも此地のものは皆之れあり。内地は貝殻を以て窓を張るも此地は多く玻璃²⁾を用ゆ。此地方は火山なく随て地震なし。又福建辺は風強きを以て瓦の葺き様も皆漆喰を用ひて日本風と略其趣を同ふす

るも、此地は大風なきを以て瓦葺きの模様も頗る粗造なり。壁の如き内地の或る部分は粗末なる塗壁を用ゆるも、多くは磚石（土を固めて天日に乾したるもの）を以て積み二重の壁をなし中空を有するものを築き、稍改良したるものは粘土に石灰砂粒を混じて両板の間に埋め堅めたるものあり。

（注）

この章は第一巻 p. 49～51

- 1) 山査 山査子サンザシ、高さ四五尺の落葉灌木、果実は食用に供す。
- 2) 玻璃 ハリ、①水晶②ガラス

III 上海の景況運輸

上海は古の呉の地にして江蘇省松江府に隸し、開港以来内外商の来り雲集する所となり四方運輸の枢区となれり。

其商業日に月に盛大に赴き、申江（嘗て春申君此地を治めしことあり、由て黃浦江を春申江と云ひ又単に申江と称す。）中には内外汽船の碇泊するもの常に七八十艘に下らず。又支那式の海船江船は大小数千艘、輻湊して帆檣林立爲め対岸を見る能はざるに至る。市街は大路縦横に通じ三四層樓櫓比連接せり。又五方雜處街上には殆んど人種の博覧会場の如く人山をなし、其繁華熱鬧¹⁾の有様は未だ曾て我国に於て見ざる所なり。

上海市街は申江に沿ひ地勢平衍にして四方山をなす。全市街を大別して南市、北市とす。南市は総て支那人の市街にして縣城も亦其中に在り。北市は外国人の居留地にして小別して英、佛、米の三租界となす。租界とは猶居留地と云ふか如し。租界中は凡て大路廣衢²⁾縦横に相交り、車馬轟々街声濤の如し。夜に入れば電気瓦斯の二燈は輝々煌々として市街の全体を照し殆んど白昼の如し、就中其最も繁華熱鬧なるを英租界となす。

南北二市合せて人口五十余万、租界には外国人より成立せる工部局³⁾、巡捕局⁴⁾及び裁判所、監獄等あり。以て租界中の土木、警察、裁判、監獄等の事務を管理せり。各租界には清国政府より置きたる大府⁵⁾あれども、實際有名無実にして少しも権力なく、唯會審員の名を以て租界の裁判所に陪席することを得

るのみ。故に三租界に住せる数十万の支那人は、自国の地に在りて少数の外国人の爲めに制せられ、政刑共に全く其掌握する所となり、何事にも是等極めて残酷なる外国人の處分に服従せざるを得ざるに至れり。

城内及租界外の地は凡て上海縣令の支配にして、暴悪なる外人も此部内には敢て其凶焰を振ふこと能はず。蘇松太兵備道は城内に駐し、蘇州、松江の二府及び太倉（直隸）州等の地方を管理す。此地に於ける内外の事務は総て此官の司どる所とす。又地方の防守には參將を置き勇兵二千余人を総統す。其營所は城内に在り、又軍器及び兵艦の製造所は城南營所の辺に在りて申江に瀕せり。其結構頗る宏大なり。之れを機器局と称し兩江總督の監督に属し、総辦一人を置き其事務を管理す。

運輸は水路四方に通じ船舶の往来間斷あることなし。又近隣各鄉村間には小車と称する一輪の荷車あり、其法一人にして車後より之れを推して進行す。大約一日間に二三十貫目の物料を、七八十清里の地に運搬することを得るなり。車輪の大車は道路狹隘なるが故に之れを使用すること能はず。牛馬は甚だ少くして専ら農事或は騎乗に用ゆるのみにして、運輸に用ゆること稀なり。又旅行には水路小舟あり、陸路轎⁶⁾及び小車あり。人力車は東洋車と称し唯市中の往来に用ゆるのみ。

上海より上流に向ふの船は毎日五百噸以上のもの凡そ十二艘宛来往せり。此船は重に乗客を取扱ふものにして一艘二百人位を載す。又寧波福州に往来するものも亦多し。又当港に輻湊する小船は常に五千艘を下らず。

（注）

この章は第一卷 p. 62～68 にして、末尾「上海より上流に向ふの船は……五千艘を下らず」は p. 57

- 1) 熱鬧 ネットウ、人が混合ってさわがしいこと。
- 2) 廣衢 コウク、ひろいみち、まちの大通り。
- 3) 工部局 租界の行政機関で上海と天津にあった。
- 4) 巡捕局 わが国の警察署にあたる。
- 5) 大府 タイフ、①貢賦と貨賦をそれぞれの官府にわかっ官 ②官廷及政府の器物を藏める庫③高官の出仕する役所。
- 6) 轎 キョウ、竹かご、山かご。

IV 上海港の景況

内は十八省より外は五大洲に至るの衣冠人物¹⁾、商賈²⁾、農工、粉黛³⁾、僕隸⁴⁾を驅て一小彈丸の地に集め、昼となく夜となく船舶往来し冬となく夏となく物貨出入するは、東洋第一の貿易港たる上海港の景況なり。

抑も上海港は清国江蘇省松江府上海縣城の在る所にて、黃浦（一名申江と稱す。相傳ふ楚の春申君の鑿つ所なりと。）吳淞兩江の會流する所に在り。古禹貢⁵⁾揚州の域にして周の時の吳の地なり。

当港は千八百四十二年彼の歴史上に有名なる阿片戦争⁶⁾の和議成りし時に開きたる互市場にして、黃浦の岸に沿ふて吳淞江に至る迄方一英里⁷⁾餘を英租界と云ひ、縣城外より洋涇浜迄を佛租界と云ひ、黃浦の左岸長さ四英里の地を美租界又虹口と云ふ。三租界共皆街衢廣寬にして縦横に通達し、大廈空に聳へ層樓雲を突き各々豪を闘かせ華を競ふものの如し。各国の領事府及び諸商行⁸⁾會社等此内に在り。而して其諸商行の店頭には貨物を安排して買客の縦覧に供するが故に、西洋雜貨店などに入るときは貨物燦爛として殆んど人目を眩せしむ。然れども是れ本通りの景況なり。若し裏店の内幕を窺ふときは、其狹隘にして汚穢なること実に名狀の限りにあらず。大抵裏店は支那人を始めとして五大洲の人民中最も下等なる種族の居留する所にして、卑陋なる長屋の内を幾軒とも仕切りて其内に幾家族ともなく往居せり。若し五大洲の風俗人情を一瞬の下に觀察せんと欲せば、上海に遊んで此裏店の内を見るに若かずとは或る人の戲言なれども、実に穿ち得て妙なりと云ふべし。而して日本人の住居する所は多く此域内にあるを思へば、此地に留學せる余輩も亦大に肩臂の縮まるを覺へたり。数年前迄は此内にて淫を鬻ぎ色を賣るの無廉耻女甚だ少からざりし由なれども、今は其筋の取締嚴重なるを以て不行届のものと見ゆるは、未だ全く其跡を拂ひ去るには至らざるも大に減少せしぞ何程かの仕合と云ふべし。

港口の兩岸には船渠及び各種の製造場ありて、烟突空に聳へ炭烟天に漲り鍛鉄の響伐木の声殆んど人耳を聾せしむ。其規模の宏大にして其事業の繁盛なること、実に驚嘆に堪へざるなり。而して此等の事業は皆歐米人の管理する所に

して、此等の場所は皆欧米人の所有する所なり。嗚呼欧米諸国の海に無数の戦艦を泛べ陸に百万の兵士を畜へ、入ては一国の独立を保ち出ては天下の衝を争ふものは其国豈に偶然ならんや。

港内は頗る廣濶にして自然に湾形をなす。湾頭に沿ふて栈橋あり。縣城小東門外より起りて下海浦に至る。此内招商局⁹⁾及び太古、怡和の兩行は、局面最も大にして栈橋も亦最も多し。其他馬立師、麦辺及び我郵船會社も亦共に栈橋あり。而め郵船會社の栈橋は、日本領事館の隣り郵船會社支店の前に在り。渾船栈橋に着するときは直に領事館頭の旭旗を見るを得べし。凡そ船舶の港に着する時に当り船内の雜沓するは各地皆同一なりと虽ども、就中清国の諸港にては其喧囂混雜実に名状すべからず。一船埠頭に到らんとするや、何くよりか頭はれ出でけん辮髪を頭に纏ひ浅黄色の長袖を被たる無数の役夫は、天秤棒と細縄とを持ち岸上に群れ立ち、船漸く岸に着けば先を争ふて船内に乗入り船客の荷物を運び出さんとあせげども、埠頭には検縄を張り容易に船内に近けず。若し縄を切て立入らんとすれば船員縄内に在て大なる棒を振り廻はして之を逐ひ拂ひ、拂へば又集り集まれば又拂ふ、其五月蠅きこと言はん方なし。斯くて船体全く埠頭に着き船員検縄を解くときは、彼の無数の蠅社會は一時にどつと関を造りて闖入し、船客に迫りて荷物を運び出さんことを求む。其喧囂雜沓殆んど人声を辨せず。此際船客にして少しく不注意なるときは、往々行李を持ち逃げらるることなきにあらずと云ふ。是れ支那に来るものの最も注意すべき所なり。又港内には渾船の碇泊すること常に七八十艘に下らず。

日本領事館は美租界に在り。日本人も亦多く此近街に居留せり。

（注）

この章は第一卷 p. 156～162

- 1) 衣冠人物 衣冠をつけた人、官吏の称。
- 2) 商賈 ショウコ、商人のこと（商は行商、賈は店あきない）。
- 3) 粉黛 フンタイ、おしろいと眉ずみのことで化粧した美人のこと。
- 4) 僕隸 ボクレイ、しもべ、めしつかい、下男。
- 5) 禹貢 ウコウ、夏の国を建てた君の名、初め堯・舜二帝に位え大水を治めて大功あり舜から位をゆずられた人。
- 6) 阿片戦争 1840～42年アヘンの密貿易をめぐるイギリスと中国の清との間におこ

った戦争、イギリスは清から茶を多く買いこんで銀の支払が多くなったことから、インドに産するアヘンを清の人民に賣りつけた。清は人体に害があるうえ逆に銀の流出を防ぐためこれを取りしまった。イギリスは貿易の自由を理由として戦争をおこした。清は敗れて南京条約を結んだ。

7) 英里 1 マイル=1.609km強。

8) 商行 商店、商社。

9) 招商局 ショウショウキョク、政府所轄の汽船の事を掌る役所、清朝の同治11年から始まる。

V 上海貿易の景況

上海は千八百九十二年の終末に至り、從來曾てなき所の悲むべきの地位に陥りたりしが、是れ全く直接及び間接に支那及其商業関係線に於て投機的商業をなしたるの結果なり。故を以て正當なる商業の関する範囲外に於ては、清外両商共該年度の貿易に向け酷評を下すの理なかるべし。実に千八百九十二年度の貿易額は、之を前年度に比するに幾分の減少を来したらんと虽ども、是れ普通變動の然らしむる所にして、格段なる原因ありしにあらざるなり。今該年度と前二年間の貿易額を比較すれば左の如し。

(海関両)	1892年	1891年	1890年
外国輸入総額	78,777,426	77,336,115	66,426,006
内地産輸入額	49,190,079	47,374,027	48,518,744
上海産輸出総額	38,859,997	40,833,720	30,200,356
貿易額合計	166,827,502	165,543,862	145,145,106
全 純計	62,394,735	65,975,023	52,463,473

(注) 貿易額純計とは外国及内地輸入額より再輸出及上海産の内地輸出額を減じたるものなり。

又左の各税目収入の比較表を掲ぐ。

	1892年	1891年	1890年
輸入税 (阿片を除く)	2,942,615	3,140,947	2,660,119
輸出税 (全上)	1,197,440	1,241,234	829,393
沿岸貿易税 (全上)	221,344	239,411	237,556
阿片税	477,529	531,379	522,697

噸数税	209,986	214,846	166,973
通過税	50,143	49,691	54,419
阿片厘金税	1,272,475	1,415,390	1,393,698
合 計	6,371,532	6,832,898	5,864,855

此表によりて見るに千八百九十二年の減額は四十六万兩にして、其内二十万兩は阿片税及阿片厘金税に於て減少せり。外国輸入品中米国綿布類の減少三割に達したるは、千八百九十一年中同品の輸入多量ありしより、九十二年の初に当り尚ほ市場へ充溢し居りたると、米国市場に在て好況なると、秋期に至り米国に於て棉花の騰貴したるに帰せり。

日本及印度の綿布類は著しく増加し、特に印度綿糸の如きは一担に付十三兩の價格に上りたるも、千八百九十一年の輸入額に超過せり。石油及金属類の需用は減少を來したり。

輸出品中紅茶貿易は別に進歩なし。然れども外商は、上海にて買入れたる茶に対しては相当の利益を占めたり。緑茶はかなりの取引ありて、印度への輸出は漸く以て増加するが如し。生糸絹物類の取引は大に生産者及清商に利潤を與へ、外商も亦相当の利潤を得るが如し。生糸類に及ぼす爲替の影響に關して稅務司ブレドン氏は、銀貨の下落は其騰貴と殆んど同様の生糸を購買するものなりと云へり。雜貨の輸出も亦た大に増加せり。

通過券の發数は五万八千枚にして、其内支那人の取りたるものは四万五千枚なり。亦以て支那勞力の低廉にして、其外商に莫大の影響を與ふるを知るに足るべし。

船舶の出入は年を追て漸々増加するの勢あり。其増加平均数千八百八十二年には七百六十噸、千八百九十年には九百三十噸、千八百九十一年には九百八十一噸。而して千八百九十二年には一千〇二十二噸なり。

船舶の出入噸数を挙げれば左の如し。

国別	汽船（噸）	帆前船（噸）
英国	3,653,384	71,805
支邦	1,517,976	89,099
其他各国	1,149,419	58,592

千八百九十二年に於て運賃非常に低廉にして、上海漢口間支那下等一人に付二弗の減額を施したるも、船客多きを以て汽船會社は却て収入を増加せり。

金の外国へ輸出したるは殆んど七百万兩にして、輸入（重に支那各港より）は殆んど四百五十万兩。銀の輸入は一千七百五十万兩以上にして、其三分の一は外国より輸入したるものなり。而め輸出は一千四百二十万兩にして、其二分の一以上は支那各港へ輸出したる所なり。支那人等は一般に、金を以て最高の價格に上りたりとし多く賣出したりと云ふ。

因に云ふ、支那人が懷中して金銀貨を携帯し、若くは支那船にて輸出入することあるを以て、實際の輸出入額は税関報告の数に越ゆ。

阿片の取引は千八百九十一年には確固たりしも、千八百九十二年に至りては種々の原因よりして大に減少せり。之れ自然に内地産阿片の入り来りて、印度産に代りたるが爲なり。「モルヒネ」の輸入一万五千^リあり。是れ重に阿片癮を治するの効ありとの清人の迷信により、斯く多量の輸入ありしなり。

倉庫設立は大に利益を與へたるを以て、早晚外人所有の波止場にも之を設立するを欲するに至らん。

上海織布局は追々盛大に至り、織出高は多量に上りたるも未だ利益配当をなすに至らず。是れ支那人の管理たればなり。

上海港輸出入表を挙げれば左の如し。

外国より輸入品総額（市價にて）	15, 017, 485	海關兩
内地より輸入品総額（　　〃　　）	8, 517, 253	
總輸入額	23, 534, 738	
右輸入税	3, 641, 142	
總輸入額より輸入税差引高	19, 893, 596	
輸入商の利益高（但七分見積）	1, 392, 552	
荷揚時輸入品價格	18, 501, 044	
輸出品價格（市價にて）	38, 859, 997	
右輸出税	1, 197, 786	
以上合計	40, 057, 783	
輸出商の利益高（但八分の見積）	3, 108, 800	
荷積時の輸出品價格	43, 166, 583	

（注）

この章は第四巻 p. 172～180

1) 𐄣 オンス, ounce=31. 10349 grams

VI 上海輸入綿絲の日印比較及び上海輸入海産物と昆布

1. 上海に輸入すべき綿絲に就き日本と印度との比較

一、印貨三十二留（ルービー）

印度十六手綿絲四百封度一捆の製造工費、此銀貨十四円八十八匁六厘（百弗に付二百二十留替）。此工費は千八百九十年孟買「エドワード、サウンス、ミル」考課状

一、金九円五拾錢

日本十六手綿絲四百封度一捆の製造工費、双方相對して正味の工費は日本の方低廉なること五円三十八錢六厘なれども、此綿絲を製造する爲に孟買より日本迄原棉を引取る諸掛四円六十錢、同輸入税壹円二十錢合して五円八十匁なり。之を工費の九円五十匁に加ふれば十五円三十匁となりて、印度に及ばざること四十一匁四厘。

一、金三円六十三匁二厘

孟買より上海迄運賃保険料輸出税其他諸掛

一、金六円四十八匁七厘

日本より上海迄の運賃保険料輸出税其他諸掛

此内三円五十匁は輸出税なるが故に仮りに無税とすれば、六円四十八匁七厘の内より三円五十匁を引き二円五十八匁七厘となりて、孟買絲に勝つこと六十四匁五厘なり。

又孟買絲を日本に輸入せんとするには

一、金三円八十六匁三厘

運賃保険料其他諸掛

一、金三円五十匁

輸入税

合計七円三十六匁三厘，是れは前記の工費外に要するものにして，尚此他に日本着荷の上，賣捌手数料等もあることなれば逆も輸入の道なしと知るべし。

2. 明治二十四年中，上海輸入海産物担数

	日 本	支 邦	外 国
海參 ¹⁾ (黒)	8,688担	20担	3,785担
全 (白)	154	38	4,347
鰯	10,604	61,393	519
干塩魚	1,026	12,700	11
鱧鱔 (黒)	669	—	2,121
全 (白)	742	67	1,400
干蝦	5,221	1,562	662
昆布	289,930	—	125,536

露領産昆布の如き其品質の劣等なるに拘はらず價の低廉なる爲め，芝罘，天津，牛莊等地方の貧民に好銷し，無刺海參は南洋諸方より，鱧鱔は印度地方より輸入し来るが如き漸次増進の勢況を呈し，延て本邦水産の價格に影響を及すこと多し。

3. 昆布の産地及支那各地に於ける需要の割合

北海道の特産たる昆布は，支那貿易の主要品なり。其一ヶ年輸出額無慮七十余万円に達し，最近二十三年間清商より本邦に吸収せし金高は一千二百万円余の巨額なり。実に内国の需要は十分の一二に過ぎずして，其他は皆清国へ輸出するものなり。而して之か一手販賣を引受たるは日本昆布會社とす。同會社は函館に本社を置き上海横浜に支店を設け，其商品を函館に取纏めて横浜に送り，之を上海に積出して更に清国各地に分配せり。

抑も昆布は，一の隱花植物にして冷潮多き海底の岩石に生ずる海藻なり。其種類には元昆布，三石昆布，夏昆布，黒昆布，細目昆布，猫足昆布，粘液昆布あり。今左に去二十一年の産額調査より一万円以上の収得ありし，北海道の産地を挙げれば左の如し。

茅部	1,885石	10,275円
廣尾	4,811	11,205

浦河	5,926	12,587
様似	6,853	14,940
亀田	6,576	19,055
以上収得一万円以上の郡名		
釧路	15,566	38,136
花咲	16,733	40,100
幌泉	17,000	40,244
以上収得三万円以上の郡名		
厚岸	31,909	78,112
以上収得七万円以上の郡名		

右の産額調査によれば、函館以東、即ち東海岸は其重なる産地たるを知るべし。

海外輸出品として昆布の初めて清国に販賣せられしは、今を距る二百余年前に在り。当時徳川幕府は長崎會所に命じて、試に其小量を支那人に賣らしめたるに、是より販路漸く擴まりて、明和年代²⁾の輸出歳額は凡千三百石に達したり。爾來不完全なる長崎の貿易市場に於て、石数の増減、相場の高低共に一定せざりしは固より怪むに足らず。

然るに明和元年、清商成訖号等が函館に於て大に買収に掛りしより、其相場は一躍して百石に付五百四十円より七百八十円に騰貴し、同三年に及んでは更に騰貴して千二十円の最高價に上り、其輸出年額も亦二三万石より六七万石に達し、益好景氣に赴きたりしを以て、試に同十一年以来十ヶ年間の輸出平均高を調査するに十万三千石余あり。尚将来何程まで嗜好の区域を廣むべきか、幾と測り知るべからず。蓋し從來の消費地方のみを挙ぐるも、極めて廣濶なる境域に及べり。今清人の称呼に従て、昆布需要の割合を各地に配当せば左の如し。

頭番	四川省（三分）	湖南省（一分四厘）
	浙江省（二厘）	陝西省（一厘）
	甘肅省（二毛）	直隸省（七厘）
	牛 莊（二厘）	湖北省（一分五厘）
	江西省（二分）	江蘇省（二毛）
	安徽省（四毛）	福建省（五毛）
	山東省（五厘）	山西省（二厘）

	雲南省 (三毛)	河南省 (四毛)
二番	山東省	山西省
次霉	山東省	江蘇省 (十分の三)
帶絲	四川省 (十分の四)	湖北省 (十分の四)
	湖南省 (十分の二)	
二番	四川省 (十分の三)	湖南省 (十分の一・五)
	安徽省 (十分の〇・五)	湖北省 (十分の二)
	河南省 (十分の〇・二)	江西省 (十分の二・八)
三番	四川省 (十分の三)	湖北省 (十分の二)
	江西省 (十分の四)	安徽省 (十分の〇・五)
	河南省 (十分の〇・五)	

(注)

- この章の
1. 上海に輸入すべき綿絲に就き日本と印度との比較は、第五卷 p. 10~11
 2. 明治二十四年中上海輸入海産物担数は、第四卷 p. 30~31
 3. 昆布の産地及支那各地に於ける需要の割合は、第四卷 p. 24~28

- 1) 海參 カイサン、いりこ、なまこを煮て乾した食品。
- 2) 明和年代 1764~71年、清国乾隆29~36年、わが国では明和2年には海參(いりなまこ)干あわびなど俵物の生産と奨励したことが特筆されている。同4年は幕府は尊王運動を弾圧し、山県大弐、藤井右門らを処刑する明和事件が起きている。
- 3) 次霉 ジバイ、昆布の名柄。

附記——本稿作製に当って、御指導その他多大の便宜を与えて下さった本学三宅講師に深い感謝の意を表わします。